

わらんべ小径

小径がつなぐ子どもの遊び場

現代社会のデジタル化や都市化によって、多くの影響を受けてきた「子ども」の生活を健全な形に戻すべく、「子ども」を主役としたまちづくりを提案する。「大人の視点」から「子どもの視点」へと「視点の変換」を行い、まちづくりの新しい形を模索する。

本提案では、子どもを取り巻く環境における、「子どもの遊び場」の再生を通じて、まちおこしを図る。昔のように安全に遊ぶことができる「道」を再生するべく、既存の道路や低未利用地を活用した堀の道、「わらんべ小径」の整備を行う。「わらんべ小径」は、かつてこの地に存在していたお堀をたどる様に張り巡られ、子どもに自由な遊び空間を提供する。

「子どもの遊び場」が再生されたまちに、三つの遊びを提案する。歴史、文化を体感できる「れきしあそび」、自然、気候を体感できる「しぜんあそび」、最新鋭のデジタル技術を子どもの遊びに活用した「でじたるあそび」を提案する。これらの遊びを通じ、現代の子どもが失いつつあるリアルな体験を提供することができる。

子どもが安全に遊ぶことができる「わらんべ小径」のあるまちは、住む人、働く人、訪れる人など、全ての人に優しいまちとなる。福井市が誇る歴史資源を継承し、水と緑と子どもで潤う新たな都市景観と都市像を構築する。本提案が、全国の「子どものためのまちづくり」のひとつ道しるべになることを願う。

■3つの課題に対する提案

福井城址を核とした、周囲の緑や業務機能と調和した魅力あふれる都市・空間デザイン

- ・城址に設ける「ほんまる広場」を核として、緑豊かな子どもの遊び場である「わらんべ小径」を城址の周辺へ広げる様に配置することで、水や緑との調和を図る。
- ・子ども関連企業を「わらんべ小径」や「ほんまる広場」を整備した中心市街地に誘致し、子どもイベントやあそびへの参画の推進により業務機能との調和を図る。

隣接するエリアとのつながりを意識した機能、空間デザイン

- ・「わらんべ小径」が並木道や路地と結節し、城址から堀の外側へ、隣接エリアへとネットワークを展開することで回遊性向上を図る。

市民文化活動が自由に繰り広げられる空間

- ・福井城址内の「ほんまる広場」に、かつての本丸御殿の平面形状を継承した舞台が、イベント時にはステージとなり、市民文化活動の拠点となる。
- ・「わらんべ小径」と「わらんべ小径」沿いの空き家や空き店舗などを活用し、子どもを主役とした運営を行う店舗やワークショップの場を設ける。

■子どもの遊び環境の変化

今と昔の遊び環境を「時間」「空間」「集団」「方法」

「方法」という四つの要素に分けて、その変化を調べる。昔に比べ今の子どもは、都市化がもたらした自動車中心社会などの影響から遊び場を失い、また、塾やお稽古事に忙しく友達と一緒に遊べる時間が減少していることが分かる。明日の日本を担う子どもたちは、このような成育環境の悪化から、ハーチャルなものに囲まれ、リアルなものに触れる機会や集団活動の機会が減少し、社会性を失いつつあることが危惧されている。

■子どもの成育環境の要因となる都市環境

現在、子どもの成育環境（都市環境・地域・学校・家庭）の悪化などを背景に、「子どもの成育環境」に関する調査や研究が多く行われ始めている。これから都市環境のデザインを考える上で、「子どもの視点」は重要な要素となりつつある。



■「わらんべ小径」

歴史・環境・人の資源をつなぐ都市景観

「わらんべ小径」は福井の歴史を継承すべく、かつての福井城下のお堀の位置をたどるようにネットワークされた、子どもが安全に遊べるお堀状の小径である。

- ①地域の歴史を伝える「歴史的資源」
 - ②自然と触れ合える「環境的資源」
 - ③人と人がつながる「人の・社会的資源」
- を有機的につなげる役割を担う。

「わらんべ小径」は既成市街地に子どもの安全遊び場を生み出すばかりでなく、歴史、環境、人のネットワークを担い、福井のまちに新たな都市景観を構築する。



「わらんべ小径」× 子ども

「石垣」「緑」「水」という、福井の歴史と自然を感じる3つのデザインエレメントを導入する「わらんべ小径」では、場面ごとに様々な形態や遊び方が考えられる。自動車交通から隔離された安全な「わらんべ小径」に子どもが関わることにより、懐かしさをベースに進化し続ける子どもの遊び場が完成される。

A あつまる

今日は何して遊ぶ？



B さわる

生き物のお家だね。



C つくる

おいしくなるといいな。



D はぐくむ

もうすぐ立てるようになるかな。



E かくれる

ぼくたちだけのひみつ基地だ！



F かんじる

ここは昔お堀だったんだよね。



「わらんべ小径」の基本的な形態。石垣が歩車を分離し、石垣上部が通路となる。安全性の配慮から小径の片側を法面として、斜面も遊び場となる。

水が流れ、植物が生い茂る「わらんべ小径」に、虫や小動物などの生物が集まり、ビオトープを形成する。子どもは動植物などの自然に、身近な場所で触れることができる。

水が豊富な「わらんべ小径」では、田畠を作り、子どもは稻や野菜などの食物を育て、収穫し、食べる。といったリアルな体験を日常的に行なうことができる。親は、芝生の上をハイハイすることでも安心して見守ることができる。

「わらんべ小径」を浅くし、片側を階段状にすることで、乳幼児が一人で上がることができなくなる。親は、登下校時に、自分の田畠を見るのが日課になる。

「わらんべ小径」をお堀状に整備することが現実的でない場所には、地面や石垣に笏谷石などの歴史を感じる素材を施すことで、全体のデザイン統一を図り、日常的に子どもが歴史を感じることができる。